
Hello.War.

春玖

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hello・War・

【Nコード】

N9528X

【作者名】

春玖

【あらすじ】

大人気MMORPG『Hello・Work』通称H・W・HWで幾度のレベルMAXを達成、転生を繰り返してきた「椎名彩」とその双子の妹「椎名 茅」。10000人と一部の人の運命を、とあるアップデートが全てを変えた。そして気がついたらH・Wの中へ？嘘！どうなったんの！？

プロローグ（前書き）

この作品はフィクションであり実在する組織、団体、人物等とは何ら関係はありません。

ですが、他作品に影響を受けている事は確かです。あしからず不快に思われる方はドンドン批判してくださいませ。

ありのままを受け止めようと思いますので、出来るだけお手柔らかにお願いします。

作品を構成する物：主にロマンと、そしてロマン、偶にロマンが含まれていて、隠し味はロマンです。

プロローグ

とある日の深夜、私「椎名 彩」は妹と今人気のMMORPG『Hello・Work』（以後H・W）で5回目のLv・MAX（Lv・200）達成を成し遂げ、転生の段階に入っていた。

名前から簡単に想像できる通りH・Wには職業ジョブがあつて、転生する度に変更が可能だったりする。ロマン派な私はいつもネタやカッコいい職業を選んじゃうんだよね。でも後悔はしていない。それにLv・150以降は以前使用していた職業へ転職ジョブチェンジが出来るから職業は同じものでなければ何でもいい。何でもいいなら好きなものにしちやえ！つてのが私の考え。

そして、職業を大まかに分けると5個、正確に言えば20個もの数の職業がある。

戦士から派生される拳闘士、ブレイカー、恐戦士、素人。

剣士から派生されるナイト、守人、魔剣士、双剣士。

魔法使いから派生される黒魔法師、白魔法師、陣術師、召還師。

探検家から派生される冒険家、弓使い、穹使い、銃士。

盗賊から派生される悪党、忍者、海賊、処刑人。

ちなみに私が選んだ職業は

守人、陣術師、弓使い、穹使い、処刑人の5個だ。

そして職業はレベルアップクラスアップに乗じて上位職（）へ昇進させることが

できる。

上位職になるにつれて使用可能なその職業専用の術技スキルも増えていき戦闘の幅が広まるため、初心者はまず上位職を目標にするのがメジャー。

専用術技は覚えてるけど、それ以外の職技については戦闘系や生産系、系の他にも多すぎるから把握しきれてない。

っていうより、把握しきってる人なんていないんじゃないかな……。

それどころか妹「椎名 茅」の知ってる共通スキルと合わせても、たぶん全部には届かない。茅もこれから5回目のLv・MAXに到達するけど火力主義だから、必要な術技しか取ってないし知らないだろうし。昔からそういう子だもの。

そして一部の上位ユーザーのみが持つ個人術技。これは一人一人違うもので、ユーザーと運営の担当者がよく相談した上で反映されるものだ。取得条件は1回以上転生していること、他プレイヤーの迷惑になるような行為を行ってないこと、運営に協力的なこと。取得後に後者二つが遵守されていないと判断されると術技が剥奪されるので要注意が必要である。ちなみに私も茅も持つてる。私のは使い勝手悪いけどね……。遠距離攻撃限定術技だし。それと比べて使い勝手のいい茅の個人術技はズルいと思う。せめて私の術技の倍率上げて欲しい！！あつ、いや、ここだけの話ね。

茅とは職業が重ならないように相談しながらプレイしている為、茅の選んだ職業は全く違う職業だ。元々ロマン派と実力派であり被らなかつたのでお互い十分に満足してるから問題は全くない。それでいて前衛後衛、攻撃守備も考えながら選んで常にパーティープレイだからレベルの上がる速さは尋常ではない。それにあまり周りには言いたくないのだが、課金アイテムの経験値2倍アイテム等ほぼ常時使用してる。レベル上げの方法からして他から見ればおかしいのだろうが、それについては今後語るとして……。

まあかなりやり込んでる事に変わりはないし。この調子で職業コンプリートでも目指しちゃうかなー。

と、馬鹿みたいなことを考えていると、現在最後のレベル上げに必死になつてゐる妹の大声が隣の部屋から響いてきた。

「お姉ちゃん！レベル上がったよー！まだ転生してないよね！？」

予想より早い……誰かに手伝ってもらつたのかな？どちらにせよ早くて困る事なんてないんだけどね。

「うん、まだまだよ。転生の準備できたら言つてねー」

「大丈夫、もうできてる！ねー、早く転生しようよーお姉ちゃん」

全く……今までこつちが待つてたというのにこの妹は何を言つてる

のだろうか。言ってる意味がお姉ちゃんちょっと分からないです。誰か説明プリーズ！っていうのは冗談で。

「はいはい、わかったから。じゃ、5回目の転生張り切って行こー！」

「おおー！」

カチャ——ピンポンパンポーン！アカウント名【アーヤ】様、転生するとLv・1に戻りますがよろしいですか？ はい／いいえ

キーボードを叩く音が鳴ると同時に毎度少しだけイラッとする機械音が流れてきた。それと同時に選択肢が出る。ここは当然「はい」を選ぶ。っていうかここで「いいえ」を選ぶ人っていないよね？もしいるなら超絶サービスで一番火力のある術技をぶっ飛ばしてあげちゃう！やだ素敵！

↓はい／いいえ —— カチャ——ピンポンパンポーン！転生しました！転生しました！Lv・1に戻りました！おめでとー！これで君も廃人の仲間入りだね！無職だね！非リア充だね！リア充なんて死んじまえクソヤロー！！

【カーヤ】Lv・1 職業：無職

ふう……。これで転生完了。今日はこれから超大型アップデートがあるらしいからログアウトした。もう夜遅いしね……。ハローワーク

には明日行こう。職業決めるのもそれからいいや。

そんなことを考えながら寝る準備をしてるとパジャマ姿の茅が部屋に入ってきた。

「お姉ちゃん。もうログアウトしたー？」

「今したとこ。茅ももう寝るの？」

「うん。アプデが終わる前に寝そうだよ。過去最大のアプデだし、朝までのお楽しみってことでいいかなと思って！」

「内容も公開されてなかったから相当変わるだろうね……あーカタストルの術技の倍率下がったりしたら私泣くよ。絶対泣く。エフェクトの簡略化されても泣ける自信がある」

んーっと伸びをしてから完全に寝る態勢に入る。

「茅も明日が楽しみなら早く寝なさい。起きててもしょうがないよ？」

「わかってるって。おやすみー！」

ドアを勢いよく閉めて自室に戻る茅に深く嘆息をつき、アップデートの内容や次の職業のことを考えてるうちに意識が落ちた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

翌朝、起きて直ぐPCを立ち上げる。耳をすませると隣の部屋でドタバタと音が響いてる。たぶん同じタイミングで起きた茅が慌てて同じ行動を取ったのだろうと予想。立ち上げたらまずはランチャーを起動した。これ基本。覚えておきましょう。で、アップデートの内容はつと……。

「えっ？嘘……」

『アップデート内容』

・転生システムの廃止。尚、これまで取得した経験値はなくなりません。

・Lvの無制限化。上記の経験値は全て引き継がれます。

・個人術技の配布停止。

・新Map「ダマスカス」の実装。

・新Chapter「The Legend of Nine」の実装。

・新Questの複数の実装。

・新MOBの配置。

・既存MOBのLv修正。

・特定MOBの取得経験値修正。

・新装備の実装。

・新術技の実装。

更に一つ新しいシステムを実装しました。こちらはゲームを開始してからのお楽しみということでお願ひします。尚このシステムについては、転生されたことの無い方に抽選で10000名、過去に転生された方を対象に適応されます。このアップデート以降の新規ユーザーには適応されません。以上がアップデート内容です。これからも引き続き、よきHello・Work・生活を。

アップデート前に2名のユーザーが転生、その後職業を選択せず更新されました。この2名の転生は認めますが、新しい職業は選択できません。今後このようなことが無いようご注意ください。』

「新しい職業が選べない……だと……？」

つい言ってしまった。後悔はしていない。おっと、そんなくだらないことをしている場合じゃなかった。早くログインしないと……！私はH・W・を起動した。

さようなら、世界。無くならない戦争、私は貴方に失望した。こんにちは、世界。そして私は、戦争を起こす。

人を殺す戦争が起こる正しい世界。

人を殺さない戦争が起こる間違った世界。

目に見えない国と国の戦争の影響により不安定な世界よ。不安定な世界から私は逃げ出す。

目に見えた戦争で安定を求める歪んだ世界よ。逃げ出した先は歪んだ世界。

正しい世界に間違った世界。共通点は平和が無いこと。

私は平和を求める。だから私は戦争を起こす。

平和への近道、それは

戦え。戦って勝て。

H・W.を起動したとき、私は意識を失った。意識を失う前に微かだが、何かが聞こえた気がした。

プロローグ（後書き）

椎名 彩 しいな あや 女

アカウント名【アーヤ】

プレイスタイル

好きな戦法：ド派手なエフェクトの遠距離攻撃で色々壊したりする
要塞攻略戦、ボス級戦

好きな言葉：粉碎

椎名 茅 しいな かや 女

アカウント名【カーヤ】

好きな戦法：超火力の近距離攻撃で多くの相手MOBを蹂躪する殲
滅戦、ボス級戦

好きな言葉：玉砕

ちなみにボス級戦は姉妹のパーティーでのみ戦う。
他のユーザーは邪魔なのだとか。

チュートリアル（前書き）

この作品はフィクションであり実在する組織、団体、人物等とは何ら関係はありません。

ですが、他作品に影響を受けている事は確かです。あしからず不快に思われる方はドンドン批判してください。かまいません。

ありのままを受け止めようと思いますので、出来るだけお手柔らかにお願いします。

作品を構成する物：主にロマンと、そしてロマン、偶にロマンが含まれていて、隠し味はロマンです。

チュートリアル

気がついたら何度か見たことがある無機質な空間だった。見たことがあるとは言っても画面の向こうの話であってリアルの話ではない。

ここはチュートリアルステージだ。それは分かる。けど、なんで私がかここにいるのかが分からない。H・Wの中に入ったと考えるのが普通だけど頭のどこかで、ありえないと叫んでいる私がいる。

いつの間にか目の前に天使のような人が立っている。確かチュートリアル of 進行役をしてくれた人だったような気がする。そんなことは関係無い。もし仮にH・Wの世界のチュートリアルだとしたらスキップ機能があるはず。どこだよスキップ機能、と考えていると丁度いい場所にSkipと表示されたボードのようなものが浮いていた。

コマンド……だよな。押せばいいのかな……？

押そうとしたとき、勝手に天使が喋りだした。

「Hello・Work・へようこそ。アーヤ様。ウリエルと申します。ここでは主に非戦闘時の操作方法の説明、戦闘方法の説明と実戦、戦争の説明と実戦、チュートリアルの修了条件となるボス級戦を受けていただきます。スキップしても構いませんが、最低限の戦闘は行っていたいただきますので、ご了承ください。」

そこまで聞いた私は迷わずSkipを押した。押して思った。

あ、いっけね。どうやって術技使用したりするんだろ。

「スキップを受諾しました。これより擬似戦争を行います。」

無機質な空間が高原に塗り替えられていく。そこにはかなりの兵士のような数をした人々がいた。

戦争が始まりました。

フィールド：高原

味方国：優勢

敵国：劣勢

勝利条件：敵国の総大将【指揮官Lv.5】を戦闘不能にする。

敗北条件：味方ユーザー全員の戦闘不能

ちょっと待つて。何、どうすればいいの！何でチュートリアル飛ばしたのよ私！私の馬鹿！

あたふたしてる間にMOBが攻撃してきた。攻撃といっても現実はその可愛いのじゃなくて、敵兵が本気で殺そうとしてきてる。私みたいな普通の女の子が怖がらないはずがない。あ、斬られた死ぬ。

【アーヤ】

LV.257

職業：劍士

H
P
1
4
0
3
7
/
1
4
0
3
8

M	1
P	1
	2
	3
	/
	1
	1
	2
	3

驚くアーヤに何度も必死に攻撃してくる兵士。驚きすぎて斬られてる当人の意識はもう勝手に表示されたステータス画面にしか向いていない。職業に剣士が選ばれるのはいつものことだ。それはいいけどLvとHPがおかしい、おかしすぎる。

そっか。上限がなくなっただっけ。Lv・150超えてるってことは転職出来るのかな……？ 転職！ 転職！ 転職！ 転職！！！！

何も起こらない現状に何度も心の中で叫ぶアーヤ。ぜえぜえと息を切らせながら必死に上から下からと攻撃し続ける兵士。そしてなかなか減らないHP。

そういえばと思い出したアーヤは今度は自分からステータス画面を

出そうと、心の中でStatusと呟く。

【アーヤ】

Lv. 257

職業：剣士

HP 14029 / 14040

MP 1123 / 1123

浮かび出たステータス画面の剣士と表示された部分に触れると画面が切り替わった

転職

職業一覧

【イージス】 戦士より派生 守人最上位職

【ドラグノフ】 探検家より派生 弓使い最上位職

【カタストル】 探検家より派生 穹使い最上位職

【エリアマスター】 魔法使いより派生 陣術士最上位職

【正義の味方】 盗賊より派生 処刑人最上位職

迷わず【カタストル】を選択する。すると幾何学的な模様の陣が頭上に現れ、足元まで降りてきたと同時に私の装備が変わる。

「へえーここまで同じなんだ。なら装備は……」

Item、と心の中で唱えるとアイテムインベントリが表示される。その中にある装備の一つである【EGR - 5500】に触れるとまた陣が現れ、【EGR - 5500】だと思われる2m程の巨大な砲台が出てきた。

「わあ凄い！本物のEGR - 5500だ！！やだ何これ素敵……わあ……本物だあ……」

攻撃してくる兵士を無視し、よいしょと【EGR - 5500】を敵兵であるMOBのいる方向へ構えた。意外と軽かった。術技を発動させようとしたがここで少し迷った。スキル画面から術技を選ぶこともできるけど、それでは駄目だ。つまらない。

職業によっては連続で術技を使って攻撃する職業だってある。そんな職業の為に術技の使用に関してはあるシステムが適応されている。音声だ。PCに外部接続でマイクを繋げるリアルで術技を口に出すと術技が発動できる。

ここにはマイクは無いけど……音声認識で術技が発動できない道理は無い！！

「アトミック、メガランチャー!!」
術技【Atomic Megalauncher】発動します。

爆音、轟音、なんと表現すればいいかわからない程の音と、衝撃による地震。凄まじいエネルギーの奔流。

後に残ったのは、【EGR-5500】を前に構えるアーヤの姿と、後ろからただひたすらアーヤを攻撃する一人の兵士だけだった。

勝利条件を達成しました。
戦争が終わります。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

そしてまた無機質な空間。さっきの戦闘で大満足した私は今、たぶん無意識に顔が笑顔になってると思う。いけない、抑えなきゃ……！

「お疲れさまです。次はボス級戦となりますが、このまま戦闘に移行してもよろしいでしょうか？」

はい/いいえ

笑顔になるのを必死に堪えながら、はいを押す。するとまた高原に変わり、さっきとは違って今度は大きなゴーレムがいた。茶色だらたぶんこのゴーレムは……

【クレイジャイアントゴーレム】Lv. 8 ボス

ステータスがゴーレムの頭上に表示されてる。戦闘といっても確かこのゴーレムは動かないはず。むしろ動いたら初心者で本当にチュートリアルを受けてるユーザーは絶対に負けてしまう。Lvの問題じゃなくて、ボス相手に一人で挑むのは無謀に近い。自分のLvよりも圧倒的にLvが低いなら話は別だろうけどね。あと例外と。

動かない敵に本気で攻撃してもつまらないし、と思い引き金を引く。すると普通の銃では考えられないような銃声で弾丸が発射されゴーレムを穿ち、一撃で沈めた。無意識で引き金を引いたけど、出てきたのは通常攻撃。一発一発は高火力だが、連射ができないのが難点。

「クレイジャイアントゴーレムを倒されましたね。お疲れ様です。以上でチュートリアルを修了とさせていただきます。ではこれから退場していただきますが、そのまえに所属国を選んでください。退場した後、そちらの国からのスタートとなります。」

北の国【パージアル】

東の国【モルティエ】
南の国【ベネルクスス】
西の国【ジジミネア】

前に茅と相談したとき、次はベネルクススを選択することになったんだけど、これで大丈夫なんだろうか？

と思いつつも、他を選んでも仕方がない為【ベネルクスス】を選択した。

「ベネルクススですね？受諾しました。それでは、よきHello・Work・生活を送れますようお祈りします。いつてらっしゃいませ。」

足元に陣が出現し、私は陣から溢れ出た光に包まれた。

チュートリアル（後書き）

10 / 30 12 : 48 より

今回の戦争、戦闘は1人称ですが、以降の戦争、戦闘は3人称となります。

東の国、ベネルクスス（前書き）

この作品はフィクションであり実在する組織、団体、人物等とは何ら関係はありません。

ですが、他作品に影響を受けている事は確かです。あしからず不快に思われる方はドンドン批判してください。かまいません。

ありのままを受け止めようと思いますので、出来るだけお手柔らかにお願いします。

作品を構成する物：主にロマンと、そしてロマン、偶にロマンが含まれていて、隠し味はロマンです。

東の国、ベネルクスス

東の国【ベネルクスス】

光が収まり、目を開けるとそこは「ベネルクスス」だった。恐らく今の陣は転移系統の術技かな。となるとさっきのウリエルって天使の職業は「エリアマスター」なんだろう。私も使えるけど今は茅を探さないと。どこかに転がってくれていたら助かるんだけど。

「お姉……ちゃん。お腹減ったよお……」

私の妹のような何かが横に転がってるけど、ここは無視を決め込みたいところ。だってこんなものが私の妹のはずがない。こんな馬鹿が私の妹のはずがない。はずがないのだが、放っておけるわけでもないの、仕方が無く拾っていく。さっきステータス画面を見たときにお金があるのを確認した。H・W・に食事システムはないが、食べ物がないわけでは無いだろうと思い、拾った妹のような何かを抱えながら食事ができそうな場所を探してみる。

「ねえ、重いから歩いてよ。私も朝ごはん食べてないから一緒にご飯食べれるところ探そう？歩くのが嫌なら置いていくからね」

「わかった。歩くよー歩けばいいんでしょー」

茅……いや、カーヤと一緒に歩いていると案の定食堂のような場所を見つけた。何かすごく建物が古いけどこの際四の五の言ってられない。私だってお腹空いた。パンが食べたいな！。

運が良かったのか、ご飯はリアルと変わらなかった。さすがに惣菜パンはなかったけど。カーヤはたぶんチュートリアルの戦争で暴れたから余計にお腹が減ってるのだろう。物凄い勢いで食べてるけど、あんな小さな体のどこに入るのだろう。

私たち双子は二卵性双生児で、似ていない。むしろ逆。私は168cmと女性にしては結構長身な方で、カーヤは152cmしかない。でも私より胸がある。むかつく！とはいっても別にカーヤが特別大きいわけではなくて、平均的なものだろう。っていうか私の胸がちょっと小さいだけで……くそ！結局胸かよ！男なんて皆胸があるほうがいいんだろ！？ロリ巨乳がいいんだろ！？身長高くてボインな姉ちゃんがいいんだろ！？くそ！男なんてぶっ殺してやる！！

- - - - -

さて、これからどうするか……戻る方法もわからないし、本心ではまだここにいたい。楽しいもん。あたりまえじゃん。

「ねえお姉ちゃん。これからどうする？」

「どうしよつか。正直ここが気に入っちゃったし、流れに乗ってChapterでも進めようかなーって。戦争はいくら加護があるっていつても気分悪いしね。転生してChapter1からになるし丁度いいよ」

「そだねー。新Chapterも気になるし」

そうだった。新Chapterの存在を忘れてた。新MAPも出たらしいけど、恐らくこれは新Chapterで進入可能になるのだろう。そもそもChapterを進めないとろくに移動もできないし。

「Chapterか……となるとまずは中央都市だね。やっぱり歩きのかな？アタシ歩き嫌いなんだけど」

「私も嫌いだよ。あたりまえでしょう？加速の術技を使って走ればすぐに着くよ。カーヤも覚えてるよね？」

「うん！デストロイヤーは加速がなかったら遅すぎるからね！」

この子の破壊力で移動速度UPは怖い。本当に怖い。PKが苦手な私と違ってカーヤはその手の達人だ。カーヤとPVP（プレイヤー対プレイヤー）をしても一瞬で負けるだろう。なんて恐ろしい子なんでしょう。やはり胸か。くそ！ちよつと胸があるからって――

プレイヤーキル

—以下省略。

「お姉ちゃん。回復アイテムは買っていくの？たぶんLv的に必要無さ過ぎて荷物が増えるだけだと思うんだけど」

「そうだね。元々持つてる量で十分足りてそうだし、必要になったときにまた買えばいいかな」

他にも色々相談したり、どうやれば何ができるかなどの報告をしい、大方の操作方法は理解できた。カーヤはチュートリアルをちゃんと受けたらしい。意外すぎてお姉ちゃんびつくりだよ。

【ベネルクスス】から外にでる為の城門が見えてきた。そこには門番であろう男性が二人立っていて、どうやら検問もしてるようだ。まあ検問は中に入るときにしかされないけどね。門って実際こんなに大きいんだ……。画面を通してだとどうしても小さく見えてしまう。そりゃ小さかったら簡単に攻め込まれるだろうしね。

「その二人、止まりなさい。女の子が二人で外に出たら危ないよ。護衛を雇うか、馬車やワープポイントで移動したほうがいい。ちなみに職業はあるかい？」

いきなり話しかけられて少しびつくりした。だってゲームだと話しかけられたりしないもん。

「い、一応……カタストルなんですけど……駄目ですかね？」

ハハツと笑って認めない門番さん。どうしよう。術技でも見せたらいいのかな？

「お嬢ちゃん、冗談は程ほどにしておきなよ。大人をからかつて得する事なんてあまりないからね。カタストルってことはLv・125を超えてるってことだ。お嬢ちゃんの歳でLv・125なんて、噂にならないわけがないだろう？事実そんな噂はない」

馬鹿にされてるようで少し力チンときた。ぶっ飛ばしたりはしないが、驚かせるぐらいなら罰は当たらないだろう。Itemを唱え、アイテムインベントリから【EGR・5500】を取り出す。すると門番さんの顔が青ざめていくのが目に見えて分かった。気を失って倒れそうになりながらなんとか堪えてる。

「これで文句はないですよね？」

「あ、ああ。気をつけてな」

門番さんから直々に許可が下りたので堂々と城門をくぐる。早足で見せつけるように、不機嫌そうに。何かそんな気分で、ちよつと気が晴れた。

「待つてよお姉ちゃん！門番さん、通してくれてありがと！またねー！」

「妹さんか……あんたも気をつけなよ。姉ちゃんが強くても万が一があるかもしれねえ」

「大丈夫！私の職業デストロイヤーだから、返り討ちにしちゃう！」

門番は今度こそ気を失って倒れた。その顔は青ざめ、オーバーフロ―してしまったのか逆に清らしい顔だったのは気のせいではない。しかし青いことに変わりはない。

- - - - -

人間としてはありえない速度で森を走る二人、そのうちの一人は鎌を、もう一人は武器を持っていない。

「速いよカーヤ！私身軽な装備の職業ないんだからもう少し速度を落として！」

「その分MOB倒してるんだからいいじゃん別に！お姉ちゃんがそうゆう職業選はないのが悪いの！」

そう言つてカーヤはまた速度を上げる。たぶん道中にMOBを見つけたから先に倒しに行ったのだろつ。あ、踏んだ。酷い！酷すぎる

よあの子！倒しに行ったんじゃなくて私のこと完全に無視して行ってるよ！そういつて私も踏んでいく。今ので倒したようで少しだけ経験値が入った。

【アーヤ】

Lv257

職業：正義の味方

【カーヤ】

Lv・257

職業：達人 戦士より派生、素人の最上位職。

達人は数少ない装備を持たない職業で、いわゆる気を使って攻撃したりもする。純粹な格闘もお手の物だ。私の職業の正義の味方はいまいちよくわからない。処刑人、断罪者、正義の味方という昇進の道筋だった。戦闘方法は意外なことに魔法。ドでかい断頭台を召還してちょん切ったり、魔法で作られた鎌でちょん切ったりと色々だ。私の使う職業はそんな感じの職業ばかりで、周りからは「ネタの宝庫」とまで言われた事もある。ちなみにしっかりと報復はした。

走り始めてから1時間。ここまでノンストップだ。リアルだったら考えられない体力だなあと感慨深く思っていると、永遠中立中央都市国【ネブル】が見えてきた。見えてきたとは言っても城門である。

カーヤが加速の術技を切ったのが見えたので私も術技を切る。さすがに城門に突進したくない。

「検問だ。女二人ってことはないだろう。連れはどこにいる？」

「私たち二人だけで連れはいません。ここのギルドに用があつてきたので通してもらつていいですか？」

「連れがない……？まあいいだろう。一応だが確認しておく。中央都市では武力の行使は犯罪だ。理由がある場合は許される事もあるがな。ここは永遠中立国だ。武力は認められない。無用な武力を行使したとき、一切の職業を失うから気をつけろ」

「わかりました。忠告ありがとうございます」

「最近の子は物分りが良くて助かるな。よし、通つていいぞ。わざわざ止めてすまなかつた」

「ううん！別に気にしてないよおっちゃん！早く行こうお姉ちゃん！」

さっそうと走っていくカーヤ。ほんとちょっとぐらい待つてくれな
いかな？

「待つてよカーヤ！置いていかないでって何度も言つてるのに！あ、おじさんもまたね！」

カーヤが勝手に消えそうで本当に心配だ。やっぱり鎖で繋げておいた方がいいたろうか？正義の味方の術技に丁度似たようなのがあ

るし、これぐらいなら武力とは見なされないだろう。いや、やめよう。たぶん千切られて終わる。とりあえず、まずは先に行くカーヤを捕まえてからギルドに行こう。

私は兎を狩る獅子の如くカーヤを追いかけた。それはもう全力で。それぐらいしないと追いつかない。

Chapter 1 Start .

東の国、ベネルクスス（後書き）

【アーヤ】の職業一覧

守人最上位職【イージス】

弓使い最上位職【ドラグノフ】

穹使い最上位職【カタストル】

陣術師最上位職【エリアマスター】

処刑人最上位職【正義の味方】

【アーヤ】の職業一覧

ブレイカー最上位職【デストロイヤー】

素人最上位職【達人】

双剣士最上位職【デュエリスト】

黒魔法師最上位職【マスターマスター】

海賊最上位職【霸王】

職業の多さ≠強さ

他のキャラクターはこれほどではありません。

これ以上ぶっ飛んだやつは”あまり”出てこないのでご安心ください。

永遠中立中央都市国、ネブル（前書き）

この作品はフィクションであり実在する組織、団体、人物等とは何ら関係はありません。

ですが、他作品に影響を受けている事は確かです。あしからず不快に思われる方はドンドン批判してください。かまいません。

ありのままを受け止めようと思いますので、出来るだけお手柔らかにお願いします。

作品を構成する物：主にロマンと、そしてロマン、偶にロマンが含まれていて、隠し味はロマンです。

永遠中立中央都市国、ネブル

食べ物を売ってる露店にいたカーヤを捕まえたが、お腹が空いたと暴れるので渋々食堂に入った。1時間も走りっぱなしだったし、まだ2回目だ。今回は不問としよう。

「食べながらいいからちゃんと聞いてね。今日はとりあえず情報を集めるだけにしようと思うの。他にもH・W・に来たユーザーがあと10000人ぐらいいるはずだし、その中に中央都市に来る人もたぶんいっぱいいるしね。まずはその人たちと話をして、情報を集めましょう。大体、Chapterはいつだって進められるもん」

ごくん、と口に入ったものを飲み込むカーヤ。もうなくなったようだ。早いよ、早すぎるよ。太っても私知らない。

「アタシは先に話を聞いて回るからお姉ちゃんは宿取ってきてよ。アタシ野宿とか絶対ヤダ」

「はいはい。私は他にも色々行くところあるから、その時一緒に宿取るね。じゃ、集合場所はこの食堂で、大体日が沈み始めてきたら集合ってことにしよう」

「はい。じゃ、またあとでね！」

聞くだけ聞いてカーヤは食堂から出て行った。本当に分かったんだ

ろうか。私もそろそろ出よう。やることはいっぱいある、ありすぎて困る。時間は多いほうがいいだろう。

……ん？あれ？あの子、お金払っていったっけ？

私はこの時、中央都市から出たらカーヤをこの両手でぶん殴りまくと誓った。中央都市だと捕まるかもしれないから。それに昼はまずい、やるなら夜、それも寝る前だ。周りが寝静まった後だと悲鳴を聞かれる可能性がある。大丈夫、今から計画を練れば何も問題は無い。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

食堂を出た後、私が向かったのは宿屋。とはいっても正確な場所は分からなかったのだ、それらしい場所をブラブラしてただけ。他の目的の店があったら儲け。でも宿屋は最優先事項だから忘れないうちに行くほうがいい。

探すで見つからないのはもはやネトゲ全てに共通する事だろう。物欲センサーは怖い。私は途中見つけた雑貨屋に入り、目的のものを探した。

時計。できれば持ち運びの出来るものがいい。最悪の場合アイテムインベントリに入れて持ち運べいいけど、やっぱり持っておける物を買うのが一番だろう。

目的のものを見つけた私は、同じものを二つ買った。私とカーヤの分、お金は後で貰おう。断られたときは仕方がない。無断でもらうしかないよね。

5回にも及ぶ転生のおかげでお金に困る事が無いのは確かだけど、お金は軽くない。借りたら返す。貸したら返してもらう。盗られたら盗りかえす。踏み倒されたら足蹴にした後無理矢理返してもらう。これはどの世界でも共通なわけであって、守るべきものだろう。

「おじさん、これください」

「時計を二つだね。9000ディンだ」

トレードウィンドウが出てきたので、私はアイテムインベントリを出し、その中にあるディンを選択、ドラッグするようにトレードウィンドウまで持っていく。

自分 9000ディン：時計×2 相手

交換を承認しますか？ はい／いいえ

はいを選ぶと、アイテムインベントリの中に時計が表示された。もう大分慣れてきたっばい。

「ありがとうございます。またお越しくださいます」

定番の言葉を聞いた私は店を出て宿を探す。よかった、まだ忘れてなかった。偉いよ私、誰か褒めて！

宿を探すという大義名分の下、ぶらぶらと散歩を再開させた私はどこからか怒鳴り声が聞こえた気がした。暴力は大反対な中央都市で喧嘩は珍しいかと、若干野次馬気分で怒鳴り声が聞こえる方向へ走り出した。

「だから、戻れないんだって言ってるだろ！手がかりはあるのかよ！」

「無いから皆で一緒に探し出そうって言ってるんだ！馬鹿かお前は！いいか、これはゲームじゃない。現実なんだ。死んだら終わりなんだぞ！？」

「そんなもん死んでもないのに何で分かるんだ！もしかしたら復活ポイントまで戻されて経験値が減るだけかもしれない！大体、戦争には相手の労働力を得る為に殺さない、死なない為の加護がある。死ぬ事は無いはずだ！」

何か、私が説明する手間が省けた気がする。やったね！と、ふざけてる場合ではない。このままでは殴り合いになりそうだ。ここで殴り合いが起きると職業が無くなるだろう。

「やめてください！この国で暴動は禁止です！捕まりたいんですか！？」

「君は黙ってる！俺は今こいつと話してるんだ！」

戻る方法を探そうと言ってる男性は私にまで怒鳴り散らしてきた。私も怒鳴り散らしたからここはお相子だろう。

「その人が嫌だと言っててるんですから、もういいじゃないですか！こんな喧嘩に時間をとってる暇があるなら他の人に話を持ちかけたらどうなんですか！？」

そうだ、そのとおりだ。と否定派の同意を得るがどうでもいい。とにかく暴動をやめてほしい。

チツ、と舌打ちを一つ鳴らし戻りたい派の男性は去っていった。

「ありがとうな。お前、子どもなのになかなか度胸あるじゃん。名前は何？」

「え、あ、はい。ありがとうございます。アーヤって言います。子どもっていつでも17歳なんですけど」

「アッハッハ！俺からしてみればまだ子どもだよ。俺はクランク。歳は26だ」

26歳にもなつて何でこんなゲームをしてるんだ。と言いそうになったが、ここはグツと堪える。元々H・W・は15歳以上対象で、平均年齢は30歳に近いらしい。

そつえばと、情報を集めないといけないことを思い出した。私から言い出したんだ。ちゃんとしないといけない。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

色々といい情報が手に入ったが、そのほとんどがシステムに関することだった。操作方法がわからないとどうしようもないのから、私としては凄くありがたい。チュートリアルはやっぱり飛ばすべきではなかった。

あとは新フリークエストについての情報。とはいっても、全て対象がLv・200以上だった。ってだけだったが、これはいいことを

・ ・ ・

改は割合回復、通常は固定回復だ。職業によって使用する回復が違うのはもはや言うまでも無い。MP回復は固定回復でも問題はないが、HP回復は上位のフィールドに行くと割合回復でないと間に合わない。全く間に合わない。

もうほとんどがぶ飲み状態で赤字フィーバーひゃっほう泣きたい。と、普通はこうだが私とカーヤは違う。基本ボス級戦でしか経験値を稼がない。ボス級戦はレアドロップを落としやすいし何より高価。私たちはそれを売ってお金を作って装備と回復を整えてる。

普通ボス級戦は10人単位で挑むが私たちは違う。正確には1回転生をしてから変わった。攻撃と防御。状況によって職業を変えることによって二人でもボス級戦で戦えるようになり、物凄い勢いでLVUPし、5回もの転生をすることが出来た。ボスは確かにHPが高いが、私とカーヤの攻撃力が高すぎるのであまり関係が無い。つまり二人で個人MAPのボス級戦フォーエバーでレアドロップでお金ウハウハ、経験値はたったの二分割で経験値ウハウハだった。何よりボス級戦は楽しい。これに限る。

つい長い間語ってしまったと反省した後、上級ポーションと上級エーテルを999個になるように購入。白魔法師系の職業を取ってない私たちの唯一の難点がこの回復代。赤字ぎりぎりすぎて怖い。

目的を全て達成した私は少し早いけどさっきの食堂に戻った。カーヤが戻る前に先にご飯を食べてしまおう。カーヤは早食いだから問題は無いと思う。

オムライスを黙々と一人で食べてると、カーヤが戻ってきて開口一番に注文をした。先に私にかけ言葉は無いのだろうか。待たせてゴメンとか、さっきはお金払うの忘れててゴメンとか。別にいいんだけどね。ここを出てから全部まとめて返すから。

食べ終わった後、私はカーヤに時計を渡した。そして驚くべき事にご飯代は全部カーヤが支払ってくれて、さっきのご飯代とベネルクススでのご飯代、時計の分のお金まで返してくれた。もう今回はかりはお姉ちゃん大感激。さすが私の妹！大好き！愛してる！！と言いながらカーヤに抱きついたら、カーヤもえへへと笑いながら抱き返してくれた。愛してる。

そして店を出て、宿に向かいながら手に入れた情報の交換をする。私のほうはあまり報告するべき事はないのだが、カーヤは凄い情報を手に入れたらしい。

「……え？じゃあHPがなくなっても復活ポイントに戻るの？よかったあ……一安心したよ。これで気軽に術技ぶっ飛ばせるし難易度の高いクエストとかも受けられるね」

「うん。新Chapterのボス戦で戦闘不能になったらこの復活ポイントに戻ってきたって人がいたんだ。何か凄い強いらしいよ？Lv.220の通常MOBとか出てきたんだって。さすがにボス戦については教えてくれなかったけど」

「ううん。それだけ分かれば上出来！やっぱりさすが私の妹！ほんと愛してる！」

そういつてまたカーヤに抱きついた私。やっぱりカーヤも抱き返してくれる。身長差がありすぎて周りには双子には見えないだろう。姉妹にはみえるだろうけど。抱きついたときかすかに感じた胸の膨らみは気のせいだと信じてる。ええ、きつと気のせい。

「あれ？お姉ちゃん。胸減った？」

よし、やっぱりあとで殺そう。

永遠中立中央都市国、ネブル（後書き）

妹に向かって殺す殺すと言ってますが、じゃれたりふざけたりしてるだけです。

あまり深い意味はないので気にしないでください。

フリークエスト、黒ノ玉（前書き）

この作品はフィクションであり実在する組織、団体、人物等とは何ら関係はありません。

ですが、他作品に影響を受けている事は確かです。あしからず不快に思われる方はドンドン批判してください。かまいません。

ありのままを受け止めようと思いますので、出来るだけお手柔らかにお願いします。

作品を構成する物：主にロマンと、そしてロマン、偶にロマンが含まれていて、隠し味はロマンです。

フリークエスト、黒ノ玉

翌日、宿屋の主人からギルドの場所を教えてもらえたので、朝からギルドに向う予定。思い立ったが吉日。明日やろうは馬鹿野郎。今が吉日ならそれ以外は厄日だ。直ぐに行動するのは得でも後回しは何の得にもならない。

「だからカーヤ！早く起きて！いつまで寝てるつもりなの？もう10時よ!？」

「うるさいなあ。いいじゃん昼からでもさ……」

これをかれこれ1時間続けている。もういい加減起きてくれないだろう。ていうかもう起きてるじゃん。あとは起き上がるだけじゃん。しょうがない。

「晩御飯は肉よ。大量のね。条件は今から10分で支度をすること」

「何言ってるのお姉ちゃん。もう準備はとっくに出来てるよ?。」

全く見えなかった……だと……？馬鹿な。Lvは同じはず。一体何が違うというのだ！

- - - - -

茶番を終わりにした私とカーヤは宿屋を出て、ギルドに向かう。

「それでどうする？戦闘不能で死ぬ心配がないならずっと二人でいいと思うんだけど」

「そうだよー。弱い人は邪魔だし。強くても多すぎたら経験値とか分散されちゃうからね。アタシはお姉ちゃんと二人がいいな」

「うれしい事言ってくれるじゃない！レアドロップとか出ていざこざになったとき一々相手をぶっ飛ばすのもめんどくさいし、二人で進めよっか！」

もはや他の人の手にレアドロップが行き渡る可能性を考えていない。

「じゃあ今まで通り、使える物が出たら使える方が使う。両方使える物はレアドロップが降ってきた方が使う。いらないものは全部売る。お金は二人で共有。これで決定ね。約束破ったら一人で他国に戦争を吹っかけること！」

「いつも思うんだけど、約束破っても楽しいだけだよ。それ。お

姉ちゃん、たまに馬鹿になるのが無ければモテるはずんだけどなあ……」

「はあ？誰が貧乳でモテないって？死にたいの？」

「言っていない！それ2%ぐらいしかアタシの言った事と合致してないよお姉ちゃん！」

茶番である。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ギルドについた私たちは早速受付へ。Chapter通りで記憶が正しければ元気なお姉さんが対応してくれるはず。

「ギルドへようこそ！ご用件をお伺いします！」

「ギルドに登録したいんです。私とこの子の登録をお願いします」

「かしこまりました！ちなみに年齢は15歳以上ですよ？15歳以上でなければ登録は不可ですので、ご注意ください。そっちの女の子はいくつかな？」

カーヤはいつものことだと諦めたような顔で答えた。まあこの背格好だし、仕方がない。

「17歳だよー。職業もあるし、なんなら武器を見せたほうがいいかな？」

「いえ、自己責任ですので構いませんよ。それとこちらを記入してください」

そういつて渡された用紙に名前や年齢、職業などを記入する。その下のほうには注意事項があったけど、軽く見ただけで終わる。もう何回も見てるしね。

「ありがとうございます……す？えっ、カタストルとデストロイヤーって冗談ですよ？やっぱり武器を見せてもらっても構いませんか？」

私はItemを唱え【EGR-5500】を、カーヤは【碎身の鉄槌】というハンマーを出した。

受付さんは驚いたが建前上固まったままはいけないと奮い立たせたのか、直ぐに笑顔に戻った。

「ありがとうございます！確認しましたので、もう戻してくださいって大丈夫ですよ！むしろ戻してください怖いです！！」

やっぱり、Lvが高い状態で転生というのは初めて、というより私ただけだろう。凄く楽しい。ゲームみたいに同じ事喋ってるわけじゃないし、初めて聞くような台詞ばかりで初めてプレイしたような気分だ。

「おい、お前ら。一体何の手品のつもりだ？お前らみたいなガキが職業があつてギルドに登録だあ？職業とギルド舐めてんじゃねえぞ！ああん！？」

これはChapterの強制イベントだ。予想は出来ていた。いや、本当のこと言うと怖いけどね。足がブルブルしちゃってるからね。

「職業持つてんなら……おい受付の姉ちゃん。審判権は持つてるよな？審判してくれ」

「え、えつと……両者の同意が必要なので……」

ゲームならお姉さんは私を心配してくれていたはず。今のこのお姉さんが心配してるのは恐らくこのヤンキーもどきだろう。間違いくそつ。可哀想に。

「いいですよ。私が受けましょう。」

「えつ……わ、わかりました！両者の同意を得たので、戦闘を認め

ます！簡易戦争フィールド、発動！」

直径20m程の魔法陣が出現した。この中だと戦争と同じ状態で、死なないし、殺さない。本気でやっていいわけだ。

強制イベントが発生しました。

戦闘を開始します。

フィールド：ギルド

味方：均衡

敵：均衡

勝利条件：敵MOB【チンピラLv・13】1体の戦闘不能。

敗北条件：味方ユーザー全ての戦闘不能。

武器を出し、通常攻撃。

戦闘はわずか2秒で終了した。

- - - - -

- - - - -

「登録が完了しました。クエストを何度もクリアすることによって、特別なクエストも受注することが出来るようになるので、頑張ってくださいね!」

この場合の特別なクエストがChapterの目標だ。そのクエストをクリアすることでChapter1がクリアとなる。なのでまずフリークエストを受けないといけない。早速噂の新しいクエストでもつけよっかなあ……

「ねえカーヤ。新しいクエストが全部Lv・200制限だから受けたいんだけど、いい?」

「うん!私もそれがいい!戦闘不能になったら他のやつ受ければいいし、ボス級戦のクエスト受けようよ」

「そうだね。じゃあ、腕慣らしにこの二つと……新しいクエスト一つの三つで。Chapterの進行条件はフリークエスト三つ以上だったよね?」

「確かそうだったかな。アタシは別に何回でもクエストやってもいいし。お姉ちゃんの方が記憶力あるからそこは決めてくれていいよ」

そう言われたのを決定打に【土色の巨人の退治 Lv20以上限定】と、【水の龍の怒りを静めて欲しい Lv・75以上限定】の既存

のクエストと【黒ノ玉　Lv・200以上限定】の三つを受けた。

「あ、私たち、これからチームで動くのでその申請もお願いします。確かこれは直ぐにできますよね？」

「はい。大丈夫ですよ！この用紙にチーム名とチームの参加者の名前、職業を書いて提出してください！」

ここで迷う事はない。だってならいつも同じチーム名だから。

チーム名【壊し屋フイメ】

参加者名【アーヤ】

【カーヤ】

フイメは昔飼ってた犬の名前で、特に意味はない。これでチームが結成されたので、ギルドの専用ワープポイントに立つ。このワープポイントは、クエストの目標の地点に転送し、達成された時にギルドへ転送するという都合主義な便利グッズ。

私はQuestと唱え、【土色の巨人の退治】【水の龍の怒りを静めて欲しい】【黒ノ玉】を選択する。複数選択すると連続して目標地点に転送することができるから。

「じゃ、いくよ？準備はいい？」

「うん！」

術技【転送】を発動します。

そうしてチュートリアルと同じような光が私たちを包んだ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

フリークエスト【土色の巨人の退治】

戦闘を開始します。

フィールド：山岳

味方：均衡

敵：均衡

勝利条件：敵MOB【クレイジャイアントゴーレムLv・22】 1

体の戦闘不能 ボス

敗北条件：味方ユーザー全員の戦闘不能

遅くも、迫力のある巨体が二人に迫り、そのまま腕を振り下ろすが、二人がいたはずの場所にはいない。

「私がやるわ。確かコレって物理防御が馬鹿みたいに高いやつですよ？」

「アタシがマスターマスターで一撃で葬ってもいいんだけど。むしろそうしたいんだけど」

振り下ろしたままの体勢からゴーレムの腕の真横にいるアーヤへ腕を振り払ったが、アーヤは跳ぶことでこれを避ける。遅すぎて全く当たらない。

「じゃあ次のボスあげるよ。私にコレの相手やらせて欲しい」

「しょーがないな……約束だからね!」

うん!と返事をしたアーヤはドラグノフに転職。アイテムインベントリから武器を取り出す

「やっぱりカッコいい!もう私ずっとここにいても満足なんだけどどうしよう!」

【67式―対要塞城壁破壊用狙撃銃―遠雷】をゴーレムに向けて構え、動きの遅い何度も攻撃を避けながら術技を発動する。正式には弾丸を装填するだけ。ドラグノフには攻撃系術技はない。

「榴弾セット!」―ガシャコン!

【67式―対要塞城壁破壊用狙撃銃―遠雷】に、榴弾をセットし

ました。

弾丸が込められたのを確認した。大きく後ろに下がり、カーヤが射線上に入らないよう、後は撃つだけ。ゴーレムがアーヤに猛スピードで襲い掛かる。遅いとはいっても初動が遅いだけでスピードが乗るとそれなりの速度が出る。

だが、一歩遅い。

「Fire!!」ードゴン!

弾丸の被弾を確認。ゴーレムは大きく仰け反るも戦闘不能には到達していない。だが榴弾はこれだけでは終わらない。

「カウント! 3、2、1、0!」——ドカアアアアン!!

榴弾は着弾部が爆発する。ゴーレムが爆発した後には何も残らない。レアドロップは無いようだ。

戦闘を終了します。

フリークエストを終了します。

お疲れ様でした。

次のクエストへ移行します

- - - - -

フリークエスト 【水の龍？の怒りを静めて欲しい】

戦闘を開始します。

フィールド：水の神殿

味方：均衡

敵：均衡

勝利条件：相手MOB【蛟 L V ・ 7 4】1体の戦闘不能 ボス
敗北条件：味方ユーザー全員の戦闘不能

蛇のようなMOBが動く前に小さな影が動いた。カーヤだ。その姿はさっきまでのデストロイヤーの装備ではない。いつのまにか達人に転職したようだ。

「弧月脚！」

術技【弧月脚】を発動します。

飛んでいる蛟の真下、カーヤは勢い良く真上に跳び上がり、そのままの勢いで後転する形で蹴る。蹴り上げられた蛟は仰け反りながらも尻尾でカーヤに攻撃を仕掛ける。

「反月脚！」

術技【反月脚】を発動します。

蹴った後、宙に浮かんだ状態で体勢を無理矢理元に戻し、尻尾の攻撃を避けるように宙を蹴り、今度は前転しながら踵落としを繰り返した。これらの攻撃を蛟の頭に正確に叩き込んでるカーヤは相当な実力があるということがわかる。

「集気、練気、活気！」

術技【集気】を発動します。効果時間は3分です。

術技【練気】を発動します。効果時間は3分です。

術技【活気】を発動します。効果時間は1分です。

集気は物理防御力上昇、練気は攻撃力上昇、活気は自動HP回復力上昇だ。

頭に踵落としが直撃し、地面に落下する蛟。カーヤは自分が地に下りる前に自己補助術技を発動させ、次に備える。着地は狙われやすいだろう。一撃は我慢し、その次で決める。

しかし、蛟は混乱して攻撃してこなかった。これをチャンスと見たカーヤが蛟の、これまた目の前まで高速で移動し、トドメの一撃の術技を発動させた。

「正拳突きiiiiiiii！」

蚊の頭から赤い花が咲き、赤い花が赤い雨となって神殿に降り注いだ。リードroppは、なし。戦闘が開始され、蚊が戦闘不能になるまでの時間は、わずか12秒だった。

「私、何も喋らないまま終わったんだけど……」

戦闘を終了します。

フリークエストを終了します。

お疲れ様でした。

次のクエストへ移行します。

- - - - -

フリークエスト 【黒ノ玉】

戦闘を開始します。

フィールド：???

味方：劣勢

敵：優勢

勝利条件：相手MOB【シャドウデビル Lv・198】1体の戦

闘不能 ボス

敗北条件：味方ユーザー全員の戦闘不能

開始直後、二人の行動は早かった。アーヤはイーゼスに転職し、カーヤはマスターマスターに転職。いつものパターンなのだろうその行動に迷いは一切感じられない。ゲームだろうと、リアルだろうと、

お互いのことは何だっかわかる。だからこそ信頼し、自分はやるべきことをやるだけなのだ。

「シールド、レジストガード、守護の前奏、発動！」

術技【Shield】を発動します。効果時間は5分です。

術技【ResistGuard】を発動します。効果時間は5分です。

術技【ProtectionPrelude】を発動します。効果時間は10分です。

イージスの術技。左から、チーム全員の物理ダメージ50%カット、チーム全員の魔法ダメージ50%カット、チーム全員の最大HPの30%の上昇だ。これは負けないための手段。

「ウィーク！」

マスターマスターの術技。これは相手の弱点、物理、魔法、属性、箇所を全ての情報を得る事ができる。これは勝つための手段。だがこれには欠点がある。術技使用者は10秒間動けなくなるのだ。だからこそ、カーヤはイージスとなり、防御系術技を発動させた。

このチャンスでLv.198のMOB、それもボスが見過すわけが無い。シャドウデビルから棘のようなものが飛び出し、カーヤに迫る。しかし、その直線状にはアーヤがいる。攻撃が当たる直前のこと。アーヤが術技を発動させる。

「カウンターブレイク！」——バキイイン！
術技【Counter Break】を発動します。 効果時間は1秒です。

ガラスの砕けるような大きな音と共に棘が弾かれる。アーヤには直撃していない。何かが壁となったのだ。その壁がカウンターブレイク。一瞬しか発動しないが、防御に成功すればどのような攻撃も防ぐ事ができる。稼ぐ事が出来た時間は多くは無い。その証拠に今度は弧を描くように、一定感覚で複数の棘が飛び出してきた。この攻撃はカウンターブレイクでは弾けない。ならばとアーヤは次の一手に出る。

「オープンキャッスル！対象、カーヤ！」
術技【Open Castle】が【カーヤ】に発動されます。効果時間は30秒です。

アーヤは自分を諦めた。オープンキャッスルはチーム参加者一名に對して発動する事が出来る術技で、これが破られた事は一度も無い。アーヤはそれを使い、動けないカーヤを守った。敵の攻撃がアーヤを襲う。

「つぐう……！い、意外といたい……」

この場に他のユーザーがいれば、痛いだけで済んだことに驚愕するだろう。

【アーヤ】

LV・257

HP 43988 / 45603

MP 408 / 553

ダメージ量はそれほど大きくは無いが、これは防御系術技を使用したイージスの防御力でのダメージ量である。そしてそれとは関係なく、装備が充実していたところで攻撃を受けるのは生身の女の子。痛いのは当然である。しかし、その間に10秒が過ぎる。

「ごめん、お待たせ！魔法、光、箇所は全部！」

「ほんと痛かった！あとで何か奢ってよね！」

「はいはい。ブレイズー！」

術技【Blaze】を発動します。

カーヤが術技を唱えると出てきたのは複数の炎の球体。その全てが物凄い勢いで中心が回転していて、見るだけで燃えそうだ。炎の球体は連続してシャドウデビルに炸裂し、シャドウデビルは重低音の悲鳴のような声をあげた。その間にアーヤはカタストルに転生する準備に入る。しかし、それを邪魔するかのように棘の攻撃をしかけてくる。

「お姉ちゃんの邪魔はさせない！コールドストップ！対象、シャドウデビル！」

術技【ColdStop】が【シャドウデビル】に発動されます。

瞬間、棘の進行がとまる。シャドウデビルは完全に凍りついた。だが、ボス級には大抵、こういう術技が効かない。簡単に倒せてしまいうからだ。案の定数瞬後にまた動き出す。

「残念。少し遅かったね！アトミック、メガランチャー！！」——ズドオオオオオン！

術技【AtomicMegaLauncher】を発動します。

爆発が起こり、シャドウデビルは動かない。元々動くといっても棘を出すだけだったので、こういう表現があってるのかどうかかわからないが、ぴくりとも動かない状態だ。戦闘不能なら御の字、違ってもこれは好機だ。好機だと判断してからのカーヤは早い。すかさずデストロイヤーに転職し、加速の術技を使用。動かないシャドウデビルを肉迫する。

【シャドウデビル】

LV	198
HP	10198 / 50000
MP	246 / 300

システムの一つで、戦闘時間が長引くとMOBのステータスが明らかになる。確かに戦闘開始から結構な時間が経つ。アニメなんかは

何十分と戦闘してる事があるが、ありえない。戦闘は瞬間の勝負だ。

シャドウデビルの目の前に移動したカーヤ。アーヤは万が一の為にもう一度術技を発動させる用意。デストロイヤーの持つ唯一の魔法攻撃。元々デストロイヤーは物理攻撃が主だと思われ勝ちだが、本質は違う。本当に攻撃力のある術技は力と、魔法の二つで相手を穿つ。

「メーテオー、インパクトオオオオオオオオオオ！」——ドゴオオオオオン！

術技【Meteor Impact】を発動します。

爆発。打撃とは到底言いがたい攻撃が炸裂した。今度こそ完全にシヤドウデビルは戦闘不能だろう。この術技、軽く40000は持つていかれる。シャドウデビルのHPは残り10000と少しだった。生き残る余地はどこにもないだろう。

シヤドウデビルが塵となって消え去る。そこには何かが落ちていた。これがレアドロップだ。なんともショボイ出現。しかしブツは本物である。新しいクエストで出た物だから、誰も持っていないだろう。価値は相当な物と予想できる。

【黒影の指輪】レア度 × 5

効果：I n t + 2 3 D e x + 1 0

レア度は最大 × 6 だから中々珍しいものだろう。効果もかなり良い。簡単に説明するならI n tは魔法攻撃力で、D e xは命中率、クリティカルヒット率等の器用さだ。戦利品としては上出来だ。

戦闘を終了します。

フリークエストを終了します。

お疲れ様でした。

ギルドへ帰還します。

フリークエスト、黒ノ玉（後書き）

以降、戦闘は3人称で書こうと思います。そのほうがカッコよかった。いきなり変えてしまい、申し訳ございません。

そのうち、前話の戦闘も修正しますが、今は続きを書かせてください。お願いします切実に。楽しいです。

中央都市防衛戦線―上（前書き）

この作品はフィクションであり実在する組織、団体、人物等とは何ら関係はありません。

ですが、他作品に影響を受けている事は確かです。あしからず不快に思われる方はドンドン批判してください。かまいません。

ありのままを受け止めようと思いますので、出来るだけお手柔らかにお願いします。

作品を構成する物：主にロマンと、そしてロマン、偶にロマンが含まれていて、隠し味はロマンです。

中央都市防衛戦線―上

フリークエストが終了し、ギルドに帰還した私とカーヤ。あー疲れた、と嘆息してるように見せかけて心の中ではさっきのレアドロップでキャツキャウフフ状態。これはなんとしても隠さないといいい。

「Lv・198にしては弱かったねーお姉ちゃん。Chapter 9のボスの方がLv低いのに強い気がしたよー」

「確かに。まあいいじゃん。レアドロップだよ！久しぶりにレアドロップ出たし、しかもこれ絶対新装備だよ！売れるよこれ！売ろう！どうしよう私今から興奮してきちゃった！お金持ち万歳！！」

「本当お姉ちゃん好きだよな。レアドロップ。それよりご飯食べようよーお腹すいたー」

「あー先に出品だけさせてね。Market。」

唱えると、マーケットウィンドウが表示される。ここに商品を入れて値段を表示しておくで放っておいても誰かが買ってくれる。それに自分が欲しいものもこれ一つで揃えられて便利。今回はさっきヤドウデビルを倒したときにレアドロップした【黒影の指輪】を出品する。値段は……どうしよう？新装備って相場がないから困るよね。

仕方が無いので同じような効果のある装備より少し高めの値段に設

定しておいた。買取してくれたらメールで知らせてくれるので、今は待つとしよう。」

出品が終わったならご飯を食べながらさっきの反省会。あの時はこうしたほうがよかった、やっぱりあの術技じゃなくて別の術技を使うべきだった。あの短い時間で起こったことについて1時間以上語り合ってる私たちは少しおかしいのだろう。自覚はある。

「ねえ、いつまで食べるの？太るよ？」

するとカーヤは偉そうに胸を張り、胸を……くそ！結局胸——
以下省略。

「達人とデストロイヤーは運動量が激しいから太らないの！特に達人！いくら食べても太らないならアタシ、メイン達人にしようかな」

「いいなあ。私の職業動かないのばかりなんだけど。正義の味方はまだましだけど、アレはなんか違う気がする。あー私も達人欲しいなあー」

「イージスがあるじゃん。あれ装甲相当重いでしょ？あれ装備して動けばいいじゃん」

簡単に言ってくれる。イージスは装備が重すぎて加速を使っても普通に歩くのと大して変わらない移動速度しかでない。軽量化の術技

があればいいんだけど、私は生憎持っていなかった。

「いいよもう。元々大量に食べたいわけじゃないしね。最終的に太らなきゃいいの」

「アタシもチビデブは絶対ゴメンだね」

カーヤはたぶん太らない体質なんだろう。リアルでもよく食べるけど、この子は太ったことがない。あれ？じゃあなんで胸あるの？食べたものが全部胸にいつてるの？えっ？えっ？どうしよう、なんだか無性にアトミックメガランチャーをブチかましたくなってきた！！

「カーヤ！早くChapter進めるよ！時間が惜しいの。さっさと食べ終わって！もう私我慢できない！！」

「お、お姉ちゃん。いきなりどうしたの……？」

「なんでもいいでしょ！暴れたい気分なの、早く行こうよ！」

わかった！と意気の良い返事をし、物凄い勢いで食べるカーヤ。さつきから体が疼いてるので早くなんとかしたい。

カーヤが食べ終わり、支払いを終えて店を出た私とカーヤに聞こえたのは悲鳴や喧騒だった。

「キヤアアアア！！喧嘩！？暴動！？ヤダ、素敵！私も参加する！胸のあるやつは皆死ねええええええ！！！！！」

「お姉ちゃんさつきからどうしたの！？さつきからなんかおかしいよ！？いつもおかしいけど！」

人が流れていくのを見て、その現場を特定。騒動が起こってる大体の方角を把握した瞬間走り出した私と、それを追いかけてくるカーヤ。いつもと逆だけど今はそれどころではない。

それと、死ね発言は冗談。ええ、冗談ですとも。本当の目的はこの騒動を起こした元凶をぶっ飛ばすことなんだから！———そうゆうことにしておこう。

走りながら何が起ってるのかを把握するため、術技を使用し辺りを見回した。走ってて人にぶつかったら危険だから今は屋根の上を走ってる。実はこれ一度やってみたかったんだよね。

「遠視、発動！」

名前通り遠くを見る為の術技だ。これは職業の専用術技ではない。加速や軽量化と同じ系統だ。

- - - - -

中央都市の兵士の人々と、中央都市に偶然居合わせたユーザーが集まっていたのは中央都市の北門だった。どうやら喧嘩ってわけじゃないみたい。でも険悪な雰囲気だし、話は聞いた方が良さそう。

「あの、何かあったんですか？ 私たち、喧嘩を止めようと思って来たんですけど……」

嘘は言っていない。喧嘩してる奴らをまとめてぶっ飛ばせばそれで喧嘩は止まる。

「おお、君たちはユーザーかい？ 丁度よかった。パージアルが宣戦布告してきたんだ。この兵士はほとんど使い物にならない。中立国だから戦争の経験があるやつが少ないからLvが低すぎる」

パージアルとは、北の国【パージアル】のことだ。こんなイベントはゲームにはなかった。たぶんユーザーの誰かがパージアルを焚きつけたのだろう。ありがとう。これで思う存分暴れられる！ 私の攻撃に巻き込まれたらパージアルの連中と向こうのユーザーのせいだから、私を恨まないでね！

「もちろん私も戦います！この国には戦えない人がたくさんいるんです。そんな人たちを襲うなんて許せません！！」

「お姉ちゃん。顔が笑ってるよ？」

そんな馬鹿な。私のポーカーフェイスは完璧だよ！と心の中で否定する。とにかくこんなことをしてる場合ではない。いつ戦争が始まってもいいように、他の20人程のユーザーたちと私たちは北門の外に出た。戦える兵士たちには北門以外の場所から侵入してきた敵を討ってもらおう。戦えない兵士は伝令や補給等を担当してもらおう。

「とにかく、ユーザーの皆さん。所属国は違うでしょうが今は仲間です。戦争に敗北したらペナルティがありますからね。私たちが争ってる暇はありません」

「昨日の子どもか！よろしく。アーヤ……だったよな？相変わらず肝が据わってて何よりだ」

「クラंकさん！どうも、昨日ぶりです。今日はよろしくお願いします」

素晴らしいスマイルをクラंकさんにプレゼントする。カーヤはコイツ何言ってるのと言いたげな顔をしていた。今度カーヤのご飯の

中に梅干でも混ぜておこう。

ユーザー達は一箇所に集まり、作戦会議を始める。正直私とカーヤは作戦とかどうでもいいんだけど、建前上そういうわけもいかない。渋々参加する。私に至っては猫被ってるし。

「今パージアルにいる友人からメールがきた。相手はユーザーが9人だけらしい。何でも、国王に直接会って自分たちの強さを見せつけたそうだ。ユーザーは低Lvでも普通の兵士よりも強い。戦力を手に入れてその気になった国王が戦争を起こしたんだろう。兵士の戦力は圧倒的にこっちが不利だが、ユーザーの数では勝ってる。恐らく下手なことをしない限り負けなだろう」

ゴツい体して意外と知的なクランクさんにびっくりな私。どうでもいい。早く戦いたい。いつになったら攻め込んでくるのよ！早くきてよ！

待ちきれなくなった私はドラグノフに転職、更に遠視を使用して【67式―対要塞城壁破壊用狙撃銃―遠雷】、遠雷のスコープを覗き込む。これで軽く3km先ぐらいは狙撃できる。残念なことに私はまだこれ以外持っていない。他にも欲しい。でも榴弾が撃てる銃ってこれだけなんだよね……。

遠く、かなり遠くに黒いもやのようなものが見える。あれが敵だろう。今はまだ駄目だ。戦争開始の合図が始まったら撃つ。その前に場所変えようかな……。地面に這いつくばりたくないし。

「あの、私後衛なんで城壁に登っていいですか？」

「スナイパーか？わかった。援護の方を頼む。主にやられそうにな
ってる味方の周りの敵を狙撃してくれ」

ここは素直に、はいと答えておく。ごめんなさいクランクさん。味
方の周りの敵を狙撃したら味方も巻き込まれるかもしれない。で
も安心して！あなたがそう言うなら私は味方の周りの敵を狙撃する
から！巻き込まれたらあなたの責任ね！とは言えない。

「そういえば、カーヤ。回復はちゃんと大量に持つてる？」

「あ、買ってない……」

「仕方が無いな！。私は今回後ろにいるから分けてあげる」

私はTradeを唱えてトレードウィンドウを出し、その中に上級
ポーション改×300と最上級ポーション×100を入れた。これ
だけあれば大丈夫だろう。ちょっとぐらい自分でも持つてるだろ
うし。

「あ、忘れてた。それとコレも」

「……ねえ、嫌がらせだよ。これって」

私が追加でトレードウィンドウに入れたのは精神安定剤。ちゃんとした状態異常回復薬である。しかし本当の意味は他にあつて、それが嫌がらせだ。簡単に言えば馬鹿にしている。普通にトレードウィンドウに出しても受け取る人はいないだろう。だが今回は違う。どうしても必要なものを一緒に出されたら受け取るしか他は無い。表向きには妹が状態異常にかかるのを心配してるように見えるだろう。これぞ計画犯罪！悔しかったら忘れん坊なところを直してから出直してきなさい！

イージスで守った時に痛かった仕返しだとは誰も思うまい。

渋々受け取るカーヤ。これでカーヤは戦争で暴れてくれるだろう。いや、こんなことしなくても暴れるだろうけど、これだと余計拍車がかかる。ちなみにこれが初めてじゃなかったりする。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

戦争が始まりました。

フィールド：永遠中立中央都市国ネブル

味方：劣勢

敵：優勢

勝利条件：敵軍劣勢による撤退。もしくは敵ユーザー全員の戦闘不能 9名

敗北条件：自国王の戦闘不能。もしくは味方ユーザー全員の戦闘不能 23名

全てのユーザーが見えるように表示される戦争開始の告知と現在状況の説明と勝利条件。それが出た瞬間、アーヤは遠くに見える人影の中で装備が充実してる敵を、用意していた衝撃弾で狙撃した。

アーヤ様が、バンビ@くーや様を撃破しました。

戦争の現在状況の書かれてる横に大きく表示された撃破通告。まだ敵がこつちまで来てさえないのに！と騒いでいる味方ユーザーたち。それを無視するようにアーヤは次弾の準備をする。アーヤの視界の端にはカーヤが大群に向かって高速で走っていくのが見えた。

「散弾セツト。Fire!」——ズガン!

【67式—対要塞城壁破壊用狙撃銃—遠雷】に散弾が装填されました。

近くの人には普通に狙撃したように見えるだろう。しかし、アーヤが撃つたものは拡散率が極々僅かな散弾。発射直後は普通に見えても、遠くにいる敵からしてみれば大量の弾丸が一気に降り注ぐ雨。次々に直撃し、戦闘不能になる敵兵が増えていく。

今の狙撃とは言い難い狙撃により、敵は警戒態勢を敷く。大盾兵を前に出し、散弾による一方的な攻撃を防いできた。こうなると散弾

は効果が薄い。カーヤが敵に到達するまで後1分はあるだろう。それまでに何とかあと一撃が欲しい。アーヤは三度狙撃体勢に入る。

「榴弾セット。Fire!」——ドゴン!

【67式—対要塞城壁破壊用狙撃銃—遠雷】に榴弾が装填されました。

狙撃したのは物体破壊用の弾丸である榴弾。対人に対しては向いていないのだが、ここで榴弾を使うのには意味がある。ただ大盾を破壊するだけではない。

榴弾は敵兵の大盾の上側ギリギリに直撃。それにより大盾が倒れる。大盾により敵兵数名が押しつぶされ、戦闘不能になる。更に榴弾が爆発することによって、大盾が倒れた直ぐ近くにいた敵兵が吹き飛び、一気に大量の敵兵を戦闘不能にした。これは、大盾を用意したところで意味はないという警告。それにより敵兵たちは大盾を前に一気に侵攻するしか選択肢がなくなる。乱戦になってしまえば、味方が邪魔で今のような攻撃ができなくなるからだ。

敵兵の侵攻は最も賢明な判断だった。だが、進んだ先には霸王に転職したカーヤの姿。本来なら、無謀にも戦場に少女が一人で佇んでるだけだ。

カーヤが霸王の術技、【威圧する覇気】を発動していなければの話だが。威圧する覇気により、カーヤを中心とする一定範囲内に入った敵兵は萎縮し、行動不可状態に陥る。

「制圧権！対象、威圧する覇気の効果範囲内の敵兵。発動！」
術技【Right Of Suppression】を発動します。範囲内敵兵はこの戦争中の味方兵となります。

魔法陣が現れ、威圧する覇気の魔法陣と同じ大きさまで広がる。制圧権は一度の戦争で一回のみ使用することができる。効果は範囲内の敵兵を制圧し、戦争終了まで味方兵に変えることだ。ただし、これはユーザーには効果がない。まさに戦争用の術技だ。

味方を得たが、総合的な兵力から言えばかなり少ない。それに敵地のど真ん中だからすぐにやられる。しかし、この混乱に乗じて他のユーザーたちも戦闘に加わる。これで完全に流れはもらっただろう。

乱戦となり、北門前まで侵攻されるようになったが、いくら門が大きいとはいえ、戦争の観点で見ればかなり狭い。味方兵のLvがいくら低くても戦闘不能にされる前に別の兵に交替すれば、戦線は維持できる。ほぼ全ての兵力をこの戦線につぎ込んでいる為、突破される事はないだろう。

戦線が均衡となったことを確認したアーヤは自分も乱戦に参加するべく、正義の味方に転職して鎌【ジャッジメント】を構え、敵兵に接近する。本当は接近せずに遠くからぶっ飛ばしたいと思っているのか、若干不機嫌そうである。

さすがに少しは自制心を持っている為、敵味方関係なくぶっ飛ばすということとは自重しようとしている。だからこそその正義の味方なのだろう。北門へ向かおうと侵攻する敵兵に接近、殲滅する。

「邪教徒の虐殺劇、発動！」

術技【H e r e s y G e n o c i d e D r e a m】の範囲を設定します。これより、劇を――

魔法陣が出現、その広さはこれまでの陣の広さとは比べ物にならない広さだ。邪教徒の虐殺劇の効果は、この陣の範囲内だと術者は通常攻撃のみしかできなくなるが、移動速度と攻撃速度が大幅に上昇する。この陣の中だとアーヤはカーヤ以上の移動速度を得る事ができる。通常攻撃しかできなくなるので、加速との併用はできない。

「開演！」――開演します。カウント――100

術技【H e r e s y G e n o c i d e D r e a m】を発動します。
効果時間は100秒です。

アーヤの頭上にカウントが表示される。これがなくなった時、術技の効果が消える。効果が消えたとき、陣の中に敵兵が一人でも残っているるとアーヤはペナルティとして、この戦争中HPが半減される。敵兵は、軽く見積もって数百人。単純計算で1秒につき数人戦闘不能にしないといけない。それも敵ユーザも含めてだ。

瞬間、アーヤの姿が消える。正確には超高速で動いただけだが、敵

兵にはアーヤがブレた後消えたように見えた。と思ったときにはその敵兵は意識を失い、戦闘不能となる。

カウント――98 残り敵兵336人

敵兵には何も見えていない。唯一確認できるのは他の兵がやられた時に出てくる血の出方で、どこから攻撃されたのかが分かるのと、自分がやられた時に僅かに見えるだけだ。

カウント――82 残り敵兵291人

発動時は少し不安だったアーヤ。攻撃術技のように体が勝手に動くのと違って通常攻撃で動かすのは自分だ。実質的な初めての実戦に不安があるのは当然である。だがそれも杞憂に終わり、思ったよりも体がついてくる。高速にはベネルクスからネブルに移動するときにある程度慣れた。攻撃も問題はない。ジャッジメントを地面と水平に構えるだけ。これで高速で移動すれば勝手に斬れる。

カウント――60 残り敵兵214人

更にペースを上げる。気分が乗ってきたのだろう、アーヤの顔は不機嫌そうな顔から綺麗な笑顔に変わっていた。騙されてはいけない、実際してることは虐殺劇だ。傍から見ればどちらが正義の味方で、どちらが邪教徒なのかは一目瞭然だろう。

カウント——39 残り敵兵130

徐々に1秒で戦闘不能にする数が増えている。アーヤは飲み込みが早い。動きが秒数重なることによくなくていく。移動速度はあまりあがっていない。これまで腕は動かしていないが、自分から攻撃するようになったことで攻撃速度の上昇の恩恵が出てきたのだ。

カウント——15 残り敵兵1

「これで……」

視線の先には最後の敵、アーヤは超高速で接近して背後に回り、ジャッジメントを振りかぶり、振り下ろした先に――

「……終わり！」——ガキン！

――剣で弾かれる。嘘！と顔に明らかな驚愕をあらわにするアーヤ。

「ユーザーが混ざってたのね……！」

「ハッ！いたら不味いかよ！」

恐らく均衡状態の北門を突破する為に紛れていたのだろう。今だけを見れば相当運が悪いが、広い目で見れば北門の強襲を防げたから運が良い。ポジティブに考える事にしたアーヤは再度攻撃を仕掛ける。

カウント――10 残り敵兵1

再び背後に回り斬りかかるが防がれた。恐らく加速と速読の術技だ。速読は読書が速くなるのではなく、見たものを情報として認識する速度を上げる術技。そのおかげでアーヤの速度についてきてるのだとアーヤは判断した。

カウント――8 残り敵兵1

普通に攻撃しても無理だ。どこに斬りかかっても防がれる。この術技が切ればアーヤはHPが半減し、通常の移動速度と攻撃速度に戻る。もともと接近戦は苦手なアーヤだ。今倒せないと負ける。死なないと分かっても負けるのは嫌だ、とアーヤは自分を奮い立たせ、秘策に移る。敵ユーザーの周囲を超高速で走り回った。

カウント――7 残り敵兵1

ぐるぐると走り回り、攻撃の出所がわからないようにしたアーヤは素早く斬りかかる。極力接近してるように見えないよう、極力ジャッジメントが自分の影に隠れるように。アーヤは高速で敵ユーザーに肉迫する。渦を巻くように走りながら、アーヤは全力でジャッジメントを振るう。

カウント――5 残り敵兵1

しかし、やはり剣で防がれる。だがアーヤはこれだけでは終わらなかった。走り回っている自身の勢いを利用し、剣をジャッジメントの刃の根元部分で引っ掛け、そのまま背後に移る。

カウント――3 残り敵兵1

「今度こそ終わりよ」

背後に移ると同時に剣に引っ掛けたジャッジメントを滑らせ、そのまま首元につけていき首を深く切り裂く。

カウント――2 残り敵兵1

さらに胴に一閃。

カウント——1 残り敵兵0

術技【H e r e s y G e n o c i d e D r e a m】を終演します。
ペナルティは発生しません。

アーヤ様が、剣聖@まるきゅう様を撃破しました。

2度目の撃破勧告が戦場に表示された。

中央都市防衛戦線―上（後書き）

いち早く皆様にお届けできるよう、2話に分けて投稿することになりました。

面倒かと思われませんが、ご理解していただけるようお願いします。

10 / 30 21 : 45

申し訳ないです。3話に分かれました。

10 / 31 7 : 36

術技の発動について一新しました。

中央都市防衛戦線―中（前書き）

この作品はフィクションであり実在する組織、団体、人物等とは何ら関係はありません。

ですが、他作品に影響を受けている事は確かです。あしからず不快に思われる方はドンドン批判してください。かまいません。

ありのままを受け止めようと思いますので、出来るだけお手柔らかにお願いします。

作品を構成する物：主にロマンと、そしてロマン、偶にロマンが含まれていて、隠し味はロマンです。

中央都市防衛戦線―中

アーヤ様が、剣聖@まるきゅう様を撃破しました。

この報告を受けたカーヤは自分も負けていられないと奮起。霸王からデストロイヤーへ転職し、乱戦の起こる最前線より奥、敵本陣が存在するであろう場所を目指す。普通、自分が戦わずに戦争に勝利できるならそれが一番に決まっている。

「スマッシュ、クラッシャー!!」――ッドン!

術技【SmashCrasher】を発動します。

地面に碎身の鉄槌を叩きつけると、かなり鈍い音が戦場に響く。当然それだけで終わるわけがない。地面は割れ、地割れ部分に落ちていく敵兵や、ひっくり返った地面に押しつぶされる敵兵。術技が発動した一帯の敵兵はほぼ全て戦闘不能となった。しかし、そこに敵ユーザーの姿はいない。

私もユーザーと戦いたんだけど、と一人愚痴るカーヤは次々と敵兵をなぎ倒していく。暴れまくったらヤバイと感じた敵ユーザーが出てくるかも、と考えたのだが、一向に成果がでない。

「出てこないなら……こっちから行ってやるんだから!引きこもりは消毒!!」

以前自分が引きこもってH・W・をしていたことをおくびにも出さない。

いつまでも湧き出てくる敵兵と一向に出てこない敵ユーザーに、さすがのカーヤも疑問に思う。この場合行きつく先は一つ。

「時間稼ぎ……？もしかして全部の勢力を北門に集中させてユーザーが別行動でもしてるのかな？」

「そうよ。貴女馬鹿みたいな顔して意外と賢いのね」

振り返った場所にいたのは女性、それも武器を持っていない。ということは恐らくユーザーで、職業は恐戦士系か素人系だろう。

少し頭にきたが、ここは淑女らしく大人の対応を……

「っていうか貴女本当に15歳以上なの？どうみても中学生じゃない」

大人の対応として、この人に愛の鞭を送ろう。そう誓ったカーヤだが、敵ユーザーの強さが分からない。もしも自分より強かったとし

ても、楽しいからいいや。と簡単に納得する。それよりこの女性の喋り方をどこかで聞いたことがあるような気がしてならないカーヤ。

「ねえ、あんたつてもしかしてHAPPINESSのメンバー？」

「ええそうよ。もしかしてびびってるの？どうしてもっていうなら見逃してあげてもいいわよ」

チーム【HAPPINESS】、全員が過去に転生したことのある者で構成されるチームだ。つまりこの女性は転生の経験があるということ。Lv・200を超えてるということだ。油断はできない。カーヤは再度転職する。

達人やバーサーカーを相手にデストロイヤーは移動速度が違いすぎて無謀だ。相手も達人ならこちらと同じでいいが、達人はPVPでは的が小さすぎる為に向いていない。覇王はPVPではゴミ。マスターも論外だ。

カーヤが転職したのはエージェント。装備は両手に持っている二丁拳銃【・357口径 ハーバー】と今は取り出していない短剣【ダガー】。どちらかといえばPVPに向いてる職業だろう。

「へえー貴女転生したことあるんだ。子どものくせに生意気ね。あ、わかったー引きこもりね？」

散々言われているが、カーヤは激昂したりはしていない。今冷静さを失ったら負けるだろう。しかし、このままだと時間稼ぎにまんまと乗ってしまう。今はこの女性をぶっ飛ばし、万が一に備えて後退しないといけない。

カーヤは拳銃で発砲しつつ加速を使い、高速で接近する。途中、片方の拳銃をホルスターに収め、ダガーを取り出すのを忘れない。単純な攻撃は避けられてしまうが接近には成功した。カウンターはない。

「ねえ貴女名前は！？私はレイナ！職業は達人ね！」

「カーヤ！エージェント！」

一応礼儀なので答えてはおいたが、攻撃の手は緩めない。ダガーで斬りかかりながら発砲する。ダガーでの攻撃は後ろに跳躍することで回避されたが、弾丸は当たった。直撃ではないからあまりダメージは与えられてないだろう。レイナは着地と同時に仕掛ける。

「反月脚！」

術技【反月脚】を発動します。

後ろに退いた隙について攻撃しに行こうとしたところを踵落としがくるがこれを拳銃で防いだ。だがこの体勢は不味い。カーヤは踵落

としを繰り出してきたレイナの左足から逃げるように後退しようとする。

「遅い！弧月脚！！」——ドゴン！

術技【弧月脚】を発動します。

「……っ！！ちい！！」

跳び上がるように右足からの蹴りがきた。上段でガードしていた為、その下からの攻撃に対応できず、蹴りが直撃する。だが今両足は宙に浮いている。ダメージは受けたが、これは好機だ。レイナはバク転の要領で地面に手をつけ、後退をしようとする。カーヤはダメージを我慢し、そこに無理矢理術技を叩き込む。

「掌打！！」——ドンッ！Critical！！

術技【掌打】を発動します。

捻り込むよう、全身を使い回転を加えた右手の突き。外的ダメージではなく、内臓にダメージを与える為に指だけ曲げた状態で繰り出す。運が良くクリティカルヒットが出た。これでかなりのHPを減らせただろう。レイナと違い、カーヤはStr（物理攻撃力）が高い。一撃でもかなりのダメージが出る。レイナはDexよりのステータスなのだろう。

「つぐあ！？……くそ！集気！」

「逃がさない！鷹の眼！」

術技【鷹の眼】を発動します。 効果時間は30秒です。

この流れを切る手は無い。集気を使いながら後退し、体勢を整えようとするとレイナを追撃する。鷹の眼により、銃撃の命中率が一時的に上昇する。ダガーを捨て、再び両手にハーバーを装備する。この拳銃は二丁装備して初めて装備として成立する。本領はここからだ。

「マルチバレット！」——ズガガガン！

術技【MultiBarrett】を発動します。

「……っ！水面蹴り！」

術技【水面蹴り】を発動します。

「うえあ！？」

接近しつつ、ハーバーから連続で3発ずつ発砲。更にダメージを与えるが接近の際カウンターを受け、カーヤの体は一瞬宙に浮く。足払いである水面蹴りは、一番受けてはいけない。水面蹴りは当たる確立が低いかわりに、一度当たれば相手は無防備状態になる術技。

「あはは！なかなか可愛い悲鳴じゃない！翔烈脚！」

術技【翔烈脚】を発動します。

宙に浮いてるカーヤに、背を向けるような体勢から蹴り上げるレイナ。カーヤの体は打ち上げられ、コンボの始まり。いや、正確には水面蹴りが当たった時点でコンボは始まっている。

「弧月脚！双月連脚！！」

術技【弧月脚】を発動します。

術技【双月連脚】を発動します。

レイナは跳び上がり後転しながら蹴る。そこから宙を蹴り、空中から再度跳躍、更にもう二撃同じ攻撃を加える。

【カーヤ】

LV・257

HP 9032 / 15392

MP 792 / 1068

HPはまだ半分以上あるが、コンボは終わらない。レイナのHPもあまり残っていないだろう。このコンボで勝負を決めに来る。

「練気！！」

術技【練気】を発動します。効果時間は30秒です。

「つくう……！」

練気で一時的に攻撃力を上昇させるレイナ。Knock Back^{のけぞり}状態で動けないカーヤは次に備えることもできない。

そんなカーヤに放つレイナが放つ術技は、単純ゆえに達人の術技の中で一番攻撃力のある術技。

「正拳突きいい!!」——ドゴン! Critical!!
術技【正拳突き】を発動します。

落下してきたカーヤへ、待つてましたと言わんばかりの強烈な一撃が叩き込まれる。

レイナは命中率が高く、Dex中心のステータスというのは分かっていた。一番最悪なタイミングでクリティカルヒットを食らったカーヤはまるでボールのように吹き飛ばされ、転がる。

【カーヤ】

Lv. 257

HP 1231 / 15392

MP 792 / 1068

これだけ攻撃しても戦闘不能にならないカーヤにレイナは内心驚く。だが、ここで終わらせないとレイナもHPが977しか残っていない。回復される前にトドメを刺す為、接近する。もちろん練気は発

動してあるが、レイナに回復する時間など残されていない。

「いい加減死になさい！反月脚！」

術技【反月脚】を発動します。

走りながら跳躍し、そのまま高速の踵落としを繰り返す。倒れた上体のカーヤは防御を諦め、回復をしようとアイテムインベントリから最上級ポーシヨン改を取り出そうと、画面に指を滑らせる。が、ここで事故が起きた。

「えっ？」

間違えて別の武器である散弾銃【イナーシャ】を出してしまって驚くカーヤ。

「えっ？」

突然現れた散弾銃に踵落としが防がれて一瞬何が何だか分からなくなるレイナ。

「え、えつと……ごめん？マルチバレット」——ドドドン！
術技【MultiBarrett】を発動します。

「え、ちよっ！」

それ反則ー！！と聞こえた気がしたカーヤだったが。気のせいだと自分に思い込ませ、今度こそHPを回復した。

カーヤ様が、レイナ様を撃破しました。

はぁ、と深くため息を吐くカーヤ。負けた。今回はたまたま運がよかっただけだ。試合に勝って勝負に負けた、っていうのを骨の髄まで味わった。正直、達人は一番苦手な相手だ。他に使える職業がないという理由でエージェントを使用しているが、相性がいいわけではない。

あ、そういえば、と一番重要な事を思い出す。カーヤはまんまと時間を稼がれたのだ。

「くそおおおお！！1勝2敗iiiiiiii！！」

戦闘に勝った為1勝。実際負けたようなもので1敗と、まんまとしてやられたので1敗。アーヤがこの場にいたなら「カーヤ、それ勝ってないよ。0勝2敗だよ。」と言われていただろう。

うつんうつ、アタシは勝ったの！と心の中で自分に言い聞かせるカーヤ。何でもいいから、さっきまでの険悪な雰囲気返して欲しい。

加速を使用し北門へ戻るカーヤだったが、そこにアーヤの姿はなかった。ユーザーがどこにもいなかったことを報告しようとしたが、いないのならどうしようもない。

カーヤはエージェントのまま敵兵に切り込む。達人対策を何か欲しいがカーヤは直感型だから戦って覚えるしかない。

イナーシャを手に敵兵の中心に立ち、ぐるりと回りながら術技を發動する。

「マルチバレット！」——ドドドゥン！

術技【MultiBarrett】を發動します。

3発連続で散弾を発砲する。一点に向けて撃てばとてつもない破壊力に、回転しながら撃てば全方位攻撃が可能となる。

武器をハーバーに変更し、遠くにいる敵兵へ向けて構えるカーヤ。

「スナイピングショット」——ズガン！

術技【SnipingShot】を發動します。

貫通力のある弾丸を発砲。イナーシャのマルチバレット程ではないが、複数の敵兵を戦闘不能にする。

違う。これだと敵兵は倒せても達人を倒す事はできない。ハーバーの片方をホルスターに納める。これにより残った片方のハーバーは装備としての役目はなくなり、銃撃系術技をしようすることが出来ない。変わりにダガーを構える。銃撃系術技は使えないが格闘系の術技を使用することが可能となった。

もう何度目かも覚えていない加速の術技を使い、敵兵を肉迫。

「掌打!!」——ドン!

術技【掌打】を発動します。

ダガーを持った手で打つ。ただ打つだけじゃない。思いっきり押し込み、吹き飛ばして周りの敵兵も攻撃する。

ダメージはないに等しいだろうが、これで囲まれるのを防いだ。力ーやは止まらず、吹き飛ばされていない敵兵に攻撃をしかける。

特に術技を使うわけではない。蹴って、殴って、斬って、撃つ。

なるべく囲まれないよう確実に敵兵を殲滅していく。近くにいた味

方ユーザーは、その姿が舞ってるように見えた。ボソツと幼女だけどと呟いた。あ、撃たれた。

あまり姿を見せない敵ユーザー。疑問に思ったアーヤはもう一度城壁の上へ向かった。これまで出てきたのは3人だけだ。アーヤが倒した2人と、カーヤが倒した1人。あと6人いるはずなのである。

ドラグノフに転職してユーザーを探すが見えない人物は見えない。ありえない。絶対におかしい。

北門を防衛線として戦ってるが、こちらには補給がし放題。対して敵軍は補給など満足に出来るわけがないだろう。攻め込んでるのだから当然だ。それにH・W・にきてからまだ日は浅いから下準備も万全ではないだろう。なのにこのまま北門を均衡させたままではいずれ敵軍は補給ができなくなり、兵の士気が下がり撤退するだろう。

そういえば、ときつき戦った敵ユーザーのことを思い出すアーヤ。

何故彼は攻撃してこなかった？

何故剣による防御に徹していた？

まさか！

すると城壁の下から味方兵の声が聞こえた。拡声の術技を使ったのだろう。戦闘力のない兵士でもこれぐらいはできる簡単な術技だ。

「伝令です！！突然現れた6名の敵により、南門が突破されました！！援軍をお願いします！！」

アーヤの顔が驚愕に染まる。

「やられた！！」

カーヤの戦っている場所は遠い。何か聞こえたけど、何を喋っているかわからなかったもよう。

アーヤは拡声の術技を使用。本気で叫ぶ

「PVPの暫定ランキング2位じゃない……！何でカーヤ生きてるの！？」

「え、LV差でゴリ押しと運かな」

「えっ？」

「えっ？」

現在のユーザー数

味方：23人

敵：6人（HAPPINESS）

中央都市防衛戦線―中（後書き）

S t r : 物理攻撃力、アイテムインベントリに入れられる数量の上
昇 e t c ストロングス

V i t : 物理防御力、最大 H P の上昇 e t c ヴァイタリティ

I n t : 魔法攻撃力、最大 M P の上昇 e t c インテリジェンス

M e n : 魔法防御力、状態異常耐性 e t c メンタル

D e x : 命中率の上昇、クリティカルヒット命中率の上昇 e t c
デクスタリティ

A g i : 命中率の上昇、クリティカルヒット回避率の上昇 e t c
アジリティ

1 0 / 3 1 7 : 5 3

またまたすみません。術技の使用を一新させていただきました。

中央都市防衛戦線―下（前書き）

この作品はフィクションであり実在する組織、団体、人物等とは何ら関係はありません。

ですが、他作品に影響を受けている事は確かです。あしからず不快に思われる方はドンドン批判してください。かまいません。ありのままを受け止めようと思いますので、出来るだけお手柔らかにお願いします。

作品を構成する物：主にロマンと、そしてロマン、偶にロマンが含まれていて、隠し味はロマンです。

中央都市防衛戦線――下

――ズドン！

「ぐわあああ！？」

「赤」ナルイ様が、「青」わる神@幼女まんせー様を撃破しました。

王城へ向かう途中にどこからか狙撃されてしまい、味方ユーザーが一人戦闘不能になった。

「お姉ちゃん。アタシたち、ちゃんとした名前でもよかったね」

「そんなことどうでもいいから隠れて！撃たれるよ！？ヘッドショットでクリティカルで一撃よ！？ヤダもう素敵！お友達になりたい
――！！」

「走ってる人にヘッドショット狙いつて何それお姉ちゃん気持ち悪いんだけど」

「芋砂なら誰だってそれぐらいできるよ！じゃあ私ちょっとナルイいもつてるスナイパーさんと遊んでくるから、後よろしく！」

「え、待ってよお姉ちゃん！」

すぐさま身を隠し、集団から離れたアーヤ。元々ドラグノフだったから転職はしない。さっきまで見られていた。おおよその場所は特定されてるだろう。

まずは味方が狙撃されるのを阻止しないといけない。威嚇射撃をするために遠雷を装備する。

「衝撃弾セット！」

【67式―対要塞城壁破壊用狙撃銃―遠雷】に衝撃弾が装填されました。

装填するのは一番音の大きい衝撃弾だ。その分威力も高い。欠点は大きな音と反動が大きいために連続で撃てない事だが、何故か人気。

「Fire!」――ズドン！

アーヤは空に向かって適当に撃った。これでナルイはアーヤというドラグノフの存在に気づいただろう。そうなると移動中の的に照準を合わせるよりも狙撃する為にその場にとどまっている的の方が照準を合わせるほうが早いから迂闊に狙撃が出来なくなる。

ドラグノフの弱点はドラグノフ。芋砂の弱点は芋砂だということだ。

余談だが、高校に入学して直ぐの自己紹介、彩は「特技は隠れんぼ」と言っただけらしい。

子どもの頃にしたマンションでの隠れんぼ。茅が鬼で彩が隠れ役をし、何時間探しても見つからないので大人たちに協力を頼んだところ、結局見つからずじまいだった。次に彩が姿を現したのは晩御飯の時だったそう。

閑話休題。

ある意味暴走したアーヤを放っておき、カーヤは王城へ向かう。アーヤの行動は確かに突発的なものだが的を射てる。

敵のドラグノフは邪魔だ。移動の妨げになる。

アーヤが離脱して威嚇射撃を行ってからには狙撃も無く、王城に到達することができた。HAPPINESSはPK厨の集団だから達人がまだ他にもいるだろう。

カーヤはエージェントに転職する。その間に20人の味方ユーザーは王城に進入したのだろう。周りには誰もいなかった。ちよつとぐらい待つて欲しいとぼやくカーヤ。

少し遅れてしまったカーヤだったが、よくよく考えると正面から入って国王の下に向かうのは時間がかかって馬鹿らしい。

カーヤはダガーを王城の壁に突き刺し、真上に跳躍。その先で更にダガーを壁に突き刺して跳躍。それを繰り返す途中、上方の窓に人影が見えた。敵ユーザーが国王を探しまわってあそこまでたどり着いたのだろう。カーヤには気づいていない。壁に突き刺さったダガーの上で少し立ち止まって息を潜める。

念のために心の中でSkinnerを唱え、スキルウィンドウから掌打を選択し、敵ユーザーの下まで一気に跳躍した。

発砲し、窓を破壊し進入。さすがに敵ユーザーはカーヤに気づいたが遅すぎた。まともに掌打を受け、吹き飛ぶ敵ユーザーにカーヤは武器をイナーシャに変更し追撃する。

「マルチバレット!」——ドドドウン!

「うわあああ!」

「青」カーヤ様が、「赤」ぼむぼむ様を撃破しました。

「青」アーヤ様が、「赤」ナルイ様を撃破しました。

早いよ。早すぎるよお姉ちゃん。とカーヤは心の中でため息を一つ吐いた。

近道?をすることで見事に王城の6階までたどり着いたカーヤ。1階1階がとても高いのでかなり登ったことになる。おかげでダガーもあと3本しかない。この戦争が終わったら買い直さないといけなくなつた。覚えておかないとまたアーヤに嫌がらせをされてしまう。

カーヤは王城内を探索する。当然王城の中に入つたのはこれが初めてなので、どこに国王がいるのかなど全く分からない。敵味方関係なくこれは全員に共通する事だろう。

敵ユーザーは残り5人に対してこちらは22人。今外にいるアーヤ

を抜く21人で城を探索することになる。先に国王を発見できるだろうが油断はできない。何しろ相手は一騎当千の強者ばかりだ。他の味方ユーザーでは相手にならないかもしれない。

今は敵に遭遇せずに国王を発見できることを祈るしかない。カーヤは王城内を走り回った。気づけば客室が並ぶ通路。間違いなく迷った。

「赤」もるもる様が、「青」凹凸様を撃破しました。

「赤」グミ@PK厨様が、「青」バルカン様を撃破しました。

「赤」ゆーりん様が、「青」CCBGORO様を撃破しました。

「赤」グミ@PK厨様が、「青」霊夢たん@hshs様を撃破しました。

「赤」ゆーりん様が、「青」幼女@しゅしよく様を撃破しました。

「青」真ぼっちマン田中君様が、「赤」ゆーりん様を撃破しました。

「赤」グミ@PK厨様が、「青」クレアアアア@TOR様を撃破しました。

「赤」もるもる様が、「青」ワイパー様を撃破しました。

「赤」グミ@PK厨様が、「青」YesWeeeee様を撃破しました。

「赤」もるもる様が、「青」あるだ@雑魚様を撃破しました。

「青」真ぼっちマン田中君様が、「赤」グミ@PK厨様を撃破しました。

「赤」もるもる様が、「青」まさおさん様を撃破しました。

「青」真ぼっちマン田中君様が、「赤」もるもる様を撃破しました。

もるもるの撃破を最後に撃破勧告が更新されなくなった。王城のエントランスに3人で待ち伏せしていたのかもしれない。

真正面から突入しなくてよかったと、少しホッとするカーヤ。これで敵のユーザーはあと1人だから可能性のある勝利条件は国王を戦闘不能にするしかない。逆に言えばこっちは国王のいる場所に全員で固まればほぼ勝利は確定する。

カーヤは探し回るのを諦めて王城で一番たどり着いた。上の階に上がるだけなら迷っていても問題はない。そこでカーヤはエージェン
トからデストロイヤーに転職。碎身の鉄槌を装備した。

デストロイヤーは屋内戦に向いていない。遮蔽物や天井にハンマーがぶち当たったりでまともに振り回せないからだ。しかし、カーヤはあえてデストロイヤーを選択。高い天井に感謝しながら術技を發動する。

「スマッシュクラッシュアアアアア！」——ドオオオオン！！
ガラガラ——

術技【SmashClasher】を發動します。

やっぱり一応壊し屋なんだしコレぐらいしなきゃね。と馬鹿が口走った。

床を砕き、下の階に降りる。国王や味方ユーザーが巻き込まれる事を全く考えていないが、走り回るよりは効率がいい。

何度も何度も砕く。王城の最上階は13階なのでそこまで多くはないが、城の床を砕くなんて人生で一回だって経験しないだろう。7回目のスマッシュクラッシャーを使用したとき、砕けていく床の向こうに一人のユーザーと王冠を被ったおっさんの姿が見えた。

「ちわああああっす！壊し屋でえええええすう！！」

「ええ！？」

「なに！？」

だめがいいとおっさんが言ったような気がしたカーヤ。違うけど。

上の階の床を砕いたので、空中からのコンボが重要な達人でも戦える。カーヤは達人に転職し、敵ユーザーに攻撃をしかける。もう戦いは始まっている。

「多連撃！」

術技【多連撃】を発動します。

「……っ！シールドスラスト」——ガン！
術技【Shield Thrust】を発動します。

カーヤは連続して殴りにかかるが、敵の盾で跳ね返されてしまう。
剣と盾、敵の職業はグローリアスだ。となるとダメージカットの術技があるはず。使用される前に叩かないと後々厄介な事になってしまう。跳ね返され、のけぞった体を無理矢理持ち直し、再度突っ込む。国王はいつの間にか逃走していた。

「シールドは使わせない！大人しく殴られてよ！」

「嫌に決まってるだろ」

手数を増やす為に術技を使わず通常攻撃、といっても殴ったり蹴ったりしまくるだけなのだが、全て盾でいなされたり避けられる。だが敵も防御に必死で術技を唱える暇がない。しかし、達人はグローリアスに対して相性がいい。

「打ち上げ！」——ドッ

術技【打ち上げ】を発動します。

「くうっ！」

打ち上げにダメージはない。盾や武器、足だろうが手だろうが当たれば一瞬だけ宙に浮かせられる。欠点といえばリーチが短すぎるこ

とぐらいだ。Dexが高ければ水面蹴りの方が効率がいいが、St
r寄りのカーヤではまず当たらない。

結果命中したのなら話は早い。話といえど語るのは拳。カーヤは強烈な一撃を叩き込む。

「正拳突き!!」——ドンッ!

「つつああああ!!」

直撃し、数m程あとずさる。数m程の距離が出来てしまった。その事実ミスったと心の中で舌打ちする。全力で接近しようとするが間に合わない。

「君、馬鹿だね。シールド」

術技【Shield】を発動します。 効果時間は1分です。

「うるさい!反月脚!」

術技【反月脚】を発動します。

グロリアスは専門の盾職ではないので自分のみで30%しかダメージをカットできない。でもその30%はPVPの中では鬼門になってくる。守護の前奏がないだけましだろう。

そんなものは関係ない。使われたものは仕方が無い。そう割り切ったカーヤは何度でも攻撃をしかける。正拳突きを当てられた分のダメージはあるから悲観するほどでもない。

「シールドスラスト！」——ガン！

術技【Shield Thrust】を発動します。

「甘いよ！弧月脚！」——バコン！

術技【弧月脚】を発動します。

盾で足を弾かれた勢いを利用し、そのまま術技を使用する。盾を狙い、カーヤの思惑通り盾を手放させる事に成功した。

「盾がないから何なんだ！ソードソニック！」

術技【Sword Sonic】を発動します。

「つぐううあああああ！打ち上げえっ！」——ドッ！

攻撃を受けながらも再び打ち上げる事に成功する。さっきは攻撃を当てる事に必死になりすぎてコンボを繋げるのを忘れていた。

「翔烈脚うう！」——ドン！

術技【翔烈脚】を発動します。

「うわっ！」

翔烈脚自体にダメージは少ないが、敵ユーザーの体は完全に宙に放り出される。レイナと戦う前はここから正拳突きを叩き込むだけだった。が、これからは違う。まだ終わらない。

「弧月脚！双月連脚っ！！！」——ドン！ドン！ドン！

術技【弧月脚】を発動します。

術技【双月連脚】を発動します。

「く、くっそおおおおお！！！」

「練気！！！」

術技【練気】を発動します。効果時間は30秒です。

正拳突きを叩き込んだ後、追撃して終わらせる。頭の中でそうシミレーションをしたカーヤは落下する敵を数瞬待つ。……今！

——ズドン！！HeadShot！！Critical
call！！

「青」アーヤ様が、「赤」フレイア様を撃破しました。

「……………あれ？」

落下していたはずの敵がどこから狙撃を受けて吹き飛んだ。遠くのほうで「やったあ！ヘッドショットでクリティカルだ！！やだあもうほんと気持ちいい！！」とはしゃぐ声が聞こえたが、もうどうでもいい。

美味しいところ盗られた、と落ち込むカーヤ。もう無茶苦茶である。

パージアル側のユーザーが全滅しました。

中央都市ネブルの勝利条件達成により、戦争を終了します。

お疲れ様でした。

ネブル側ユーザーには戦争の勝利報酬として1人1,000,000
0Dinが支払われます。

ネブル側ユーザーには戦争の勝利報酬として経験値が2,000,000
000上昇します。

ネブル側ユーザーには戦争の勝利報酬としてアイテムが贈呈されます。

パージアル側ユーザーには戦争の敗北負債として1人5,000,000Dinを支払ってください。

パージアル側ユーザーには戦争の敗北負債として経験値が1,000,000,000下降します。

それでは、各国の復活ポイントへ転送させていただきます。
お疲れ様でした。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

戦果

【アーヤ】撃破数4 未撃墜
【アーヤ】撃破数2 未撃墜
【真ぼっちマン田中君】撃破数3 未撃墜

中央都市防衛戦線―下（後書き）

真ぼっちマン田中君は仲間になりません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9528x/>

Hello.War.

2011年10月31日16時07分発行